

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子図書館 編集：松居友

63号・2018年2月



激しい空爆もふくむ戦闘で家も崩壊して、マラウィ市から逃げてきた、戦争避難民の子どもたち。今回は、5回目の支援。前回までは、生活物資を補給する緊急支援しかし、今回は、次の段階の奨学生支援が目的だ。戦争で悲惨な目に遭った子どもたちの中でも、特に孤児や親を失った子、母子家庭などで生活が困窮している子ども達を、ミンダナオ子ども図書館の奨学生に採用して、本部に引き取り、大学まで行かせてあげるための支援。放っておけない子どもたちが多く、20名ぐらいになりそうです。すでに本部には、80人ぐらいが住んでいて、その子どもたちを加えると、100名ほどが住むことに……。いったん受け入れたらば、大学を出るまで十数年以上、我が子のように面倒を見ていかなければならないから、それなりの覚悟が必要。皆様、とりあえず数年でも結構ですから、ぜひ支援者になっただきたいね。そして、会いにいらしてください。信じられないぐらい、大喜びしますよ！

5回目のマラウイ 戦争避難民支援

松居 友

去年の暮れの12月の半ば頃、ぼくは、スタッフたちといっしょに、第五回目のマラウイ戦争避難民の支援に向かった。

前回までは、とにかく生活物資を補給する、緊急支援が第一の目的だった。しかし、今回は、いよいよ次の段階の奨学生支援が目的だ。戦争で悲惨な目に遭った子供達の中でも、特に孤児や親を失った子、母子家庭などで生活が困



窮している子供達を、ミンダナオ子ども図書館の奨学生に採用して、本部に引き取り、大学まで行かせてあげるための支援だ。

ミンダナオは、ルソン島の人々から見ると、入ることが不可能なイスラムゲリラの跋扈する危険地帯だと思われている。マニラのタクシートの運転手さんと話していて、ぼくが、ミンダナオから来たというと、ビックリして言われる。「よく、あんなところに住んでいますね。怖くないですか?」
ぼくは答える。「地域の情勢にもよると思いますが、少なくとも、ダバオよりマニラの方が、よっぽど怖いですね。」



ミンダナオ子ども図書館のあるキタパワン市からマラウイまでは、車で10時間以上かかる。

しかし、国道の両脇には、トウモロコシやイモや麦のうわっている平原が広がり、はるかかなたの丘陵地帯までヤシやマンゴーの果樹園が広がっていたりして、豊かで平和な穀倉地帯という印象だ。

現在のミンダナオ情勢に関して多少触れると、10月23日にフィリピン政府が戦争終結宣言をだして以降、表向きは戦闘が収まり、街の中心部は写真のように、空爆と砲撃で徹底的に破壊されている。



政府軍によると、あちらこちらに地雷や爆発物が埋まっている可能性があり、いまだに避難民をはじめとする一般市民は、立ち入ることが許されていない。ただし、今回は前回と違って、市の近郊の避難民キャンプにまで立ち入って、救済活動をすることができるようになっていた。

ただし、外見は戦闘が収まっているように見えていても、イスラム国関係のテロリストたちが、マラウイを放棄して、ミンダナオの他の地域に分散し、戦闘が各地で起こされる可能性があるというところで、戒厳令はさらに一年間、2018年にまで延長された。



講演会、報告会、家庭集會に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。

サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。

講演や家庭集會の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。

メールや電話でもお申し込みください。メール：mc1tomo@yahoo.co.jp

電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）

事実、私たちが日常的に活動している場所であるリグアサン湿原にも、イスラム国が潜入したという情報が入り、警星が発せられて住民が避難した。そのなかには、一昨年の12月に完成した、MCLが日本政府のODAに提案して建てた、小学校のある集落もはいつていた。避難民の中には、奨学生

の家族も入っている。
MCLは、すぐさま救済支援を企画したのだが、驚いたことに、数日後には解除されて住民は帰宅した。理由は、イスラム反政府勢力と言われているモロ・イスラム解放戦線が、同じイスラ



ムの分離派の過激な行動を抑えたのだ。後ほど分かったけれども、住民に避難警告を発したのも、モロ・イスラム解放戦線だったのだ。

最大のイスラム反政府組織が、イスラム国の影響を受けた過激な分離派を、自ら抑えたのだから、驚き以外の何物でもない。日本のJICAも含めて、私たちが15年にわたり行ってきた、平和構築活動が実を結んだ部分もあるだろう。建設が終わった小学校の開所式は、様子を見て、今年の夏あたりに

は可能かもしれない。
ミンダナオ子ども図書館の活動は、

その場限りのものではない。
例えば読み語りや医療でも、戦争が収まった後も続けていくし、とりわけ親が死んで学校に行けないような子がいれば奨学支援は、本部や下宿小屋に引き取って、我が子のつもりで衣食住を保証し、大学まで通えるようにしている。現在は、奨学生は300人で200人ほどが、本部や下宿小屋に住んで通っている。

そのような継続的な支援が実って評価され、たとえ反政府軍の支配する危険地域であったとしても、僻村や集落の人々と友情でつながって、平和を築いていくことができたのだ。

今回は、破壊されたマラウィ中心部から逃げてきた人々の多くに住む、避難民キャンプを訪れて奨学生採用の調査をした。

マラウィ市の中心部は、激しい空爆と砲撃と地上戦で、建物が徹底的に破壊されてしまい、砲弾で穴の開いたモスクや、空爆で破壊されたコンクリートの建造物が、生々しい瓦礫となって崩壊したまま建っている。

そのようなこともあり、避難民たちは、未だに政府の指定したキャンプ場のテントや屋外体育場の屋根の下で過ごしている、すでに8カ月近くたった今でも、まったく帰宅の目途が立たずに避難民生活を送っている状態だが、その中で親のいない子、家も破壊されて祖母だけで、帰るめども全くたらずに、学校も行けずにいる子などの話を聞いた。ほとんどの子達が、話しながら



ら耐え切れずに泣き出すのだった。最初は、10名強を考えていたけれども、放っておけない子たちが多く、20名ぐらいいなりそうです。すでに本部には、80人ぐらいが住んでいて、その子たちを加えると、本部に100名ほどが住むことになる。しかも、いったん受け入れたならば、大学を出るまで十数年以上、我が子のように面倒を見ていかなければならないのだから、それなりの覚悟が必要だ。

スタッフと検討して、ハウスペアレントを増やし、松居家族の部屋も明け渡して寝室にすることにしました。皆様、ぜひ支援者になっただきたいね。

サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」から「映像サイト」に入ると、現地で撮影したマラウィの活動映像を見ることが出来ます。



エープリルリンは、2003年にフィリピンにおける特別非営利法人 Mindanao Children's Library Foundation, Inc. の法人資格をとり立ち上げた。17歳の時であった。

現在にいたるまで、現地法人の代表としてマネージメントを担当し、去年、ミンダナオ子ども図書館は、北コタバト州からフィリピン全域で活動できる非営利法人となる。

NGOの大会でも講演を頼まれ、今回のマラウイ戦争避難民救済支援も、現地のイスラムNGOの代表から彼女に、直接支援の要請があり決定した。

近年日本との交流が深まった関係もあり、将来のために、現在日本で日本語と日本文化を学んでいる。



わたしの少女時代の 思い出から (10)

松居 エープリルリン

た。
でも、早く歩かなくなっちゃ、だんだん暗くなってきたわ。わたしは、砂利の小道を走った。

その日は、とっても暑くて疲れやす日だったけれど、いろいろな体験ができて、向かって歩いてた。雑貨屋に近づくわたしには、楽しくてたまらない、素敵と、一人の黄色い縞模様の服をきた裸な一日だった。
体は、汗でびしょまみれになったけど、袋を持ったまま、お店の前にたたずんとっても幸せだったから気にもならなかった。
かたし、疲れた感じもしなかった。こんな日が、毎日のように続くといいのになあ。

わたしは、もっと友だちと手を取り、こんな遅くなったの？「彼女は、ぴったり、もっと遊んで、大きな声で笑いくりしてたずねた。
ころげたり、おしゃべりしたりしたいなあ」「お友達と、おしゃべりしていたら、あ、と思った。学校が終わってからも、何時かわからなくなっちゃって・・・」

わたしは、時間をすっかり忘れて、友だちとお話したり、良い体験も悪い体験もわかちあった。
「そうだったのね。でも、いそがな夕暮れ時になって、黒雲の一つない青くくちやだめよ。おぼさんが、わたしく澄んだ空に、夕日が、赤とオレンジの混ざりあって輝きはじめてた。あなたは、どこにいるの？って。」

今日のお空は、まるでわたしの気持ちみたいだわ。
心配になってたずねた。

わたしは、すきとおった雲のなかを、お日さまの光のようになって輝きながら、お空を飛んでいるみたいなきもちがし答えたの。

「さあ、急いでいなくなっちゃ。夕暮れになる前に着くようにね。」彼女はいった。

「わかった!」。そういうと、わたしは、駆け出した。とっても緊張して、胸がドキドキした。

おぼさん、わたしが遅くなったこと、ひどく怒っているに違いない。何ていったら良いのかしら。どう説明したら良いのかしら。どう説明しても、怒りが静まらないかもね。そうしたら、わたし、どうしよう。

家に近づくと、入口の外に立って、扉をそっとたたいた。そのときのわたしの気持ち、どう説明したら良いかわからない。

わたしは、怖くて震えていた。でも、扉を叩いて、怒られるのを、じっと待



自由寄付は、一番根幹になる寄付です。

貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている200名ほどの奨学生の生活費。ガンリン代を含む活動全般の諸経費等々。機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。他の方々に紹介していただければ幸いです。



つ以外にどうしようもなかった。

三回扉をたたくと、いった。

「こんばんわ、おばさま。」

扉が開くと、わたしはおばさんの手をとって、わたしの額にあてて謝意を表した。

「神様の祝福がありますように。」と、おばさんは答えた。

「今ごろ帰ってくるなんて、何でこんなに遅くなったの?」

「アーッ。お友達たちと、とっても楽しくお話ししていたもんだから、何時になったか、わからなかったの。」と、わたしは、答えた。

「これからは、もっと早く帰りなさいよ! 午後のイベントに参加すること

は認めなければ、早く帰ってこなくっちゃだめよ!」と、彼女は、いった。

「はい、わかりました。おばさま。」

「よろしい。だったら服を着替えて、着替え終わったらすぐに、台所にいらっしやい。わたしが始めた料理を、仕上げてくださいね。夕ご飯にするから。」

「わかりました、おばさま。」

わたしは、そうこたえたと、部屋にとびこんで服を着替えて、すぐに台所にかけてどっていった。

台所には、ボールに入った魚と、テールには野菜と香草が置かれていた。

わたしは、包丁とまな板を流しにおくと、魚を洗って切り始めた。そして、シヨウガ、玉ねぎ、にんにくといった香草と、ナスビやニガウリも刻んでいた。

おばさんは、自分たちが何が食べたのか、はっきり言わなかったので、わたしは自分で考えて、シニガンイスタを作ることにした。

魚とお酢と水と野菜を炊き込んで。まずは、玉ねぎ、にんにくにシヨウガをまぜて、そのうえに魚の切り身をおいて、さらにその上にナスとニガウリをおいて、最後に汁をとるための御酢と塩水をそそいで、焚き台においた。それから、お皿とスプーンとフォーク

クと、炊き上がったご飯を机において、魚が煮あがるのをまつた。その後10分か15分でできあがり。

「おばさま、おじさま。夕ご飯ができました。」わたしがいうと、「オーケー!」という返事がして、おばさんは、子どもたちを夕ご飯によんだ。

おばさんの家族がそろって食べ始めると、わたしは家の裏にいき、豚のえさの準備をした。サツマイモの茎とウモロコシの残りを刻むと水にひたして、豚の夕ご飯にした。

「さあ、かわいい豚と子豚ちゃん。あなたたちの夕ご飯が、出来たわよ!」

わたしは、いつものようにそっくりなと、豚たちは、押し合いへし合いしな

がら食べはじめた。食べ終わるまでは静かで、食べ終わると満足そうだった。

わたしは、豚に餌を与え終わると、台所にもどった。中に入ると、家の人たちは、ちょうど食べ終わったところだった。

「ああ、おまえ、そこにいたのね。お腹がすいたでしょう、そこにあるものが、食べたらいよいよ。」と、ジェニーがいった。

ジェニーは、おばさんの次女だ。率直で、時には親切な子だった。

「ありがとう。」と、わたしはこたえた。

夕ご飯を食べ終わると、お皿を洗い、いつものようにバケツを持って、井戸に水を汲みに行った。

「神様ありがとう。いつも、見守っていてくださって。」わたしは、そうつぶやくと、夜空を見上げた。



マンダナオ子ども図書館の 奨学生が語ってくれた昔話

Jerly B. Awe 16歳

マノボ族 マノンゴル高校3年生

まずは、自己紹介から

僕は、ジェリー。アラカンの山あいの村、トゥマンディンのカヨパトンという集落が、僕の故郷です。

「パノバット・トバット」というマノボ族の宗教で、創造主である「マナマ」を信じ、「バヌバラン」というお祈りのための家で、祈ります。

2017年の前期期末テストまでトゥマンディン高校で勉強し、秋休みの終わった後期からMCLに移りました。今、高校3年生です。この8月に、同じカヨパトン出身のジュノが帰省したときに、自分もMCLの奨学生になれないか話してみたいです。



ジュノは、6年前に奨学生になり、高校からMCLの寮に入って通学しています。

僕はジュノや弟のジョバート、ジムと幼なじみで、よく遊んでいました。ジュノのお父さんと、僕のお母さんがいとこどうしなので、僕たちは親戚です。他にもMCLの奨学生のランやアリシャ、ミチックが親戚になります。この11月からMCLの奨学生として、キダパワンのマノンゴル高校で学ぶことになりました。

僕の父は45歳、母は48歳で元気ですが、家族はとても貧しいです。僕は本当は11人兄弟でしたが、4人の兄と弟、妹の6人が亡くなり、今は5人しか残っていません。僕は今は末っ子になってしまいました。亡くなった原因は病気です。お金がないので、病気になっても薬を買ったり病院に連れていけずに、死んでしまいました。15歳まで生きたのに死んでしまった兄や、キノコの毒で亡くなった兄もいます。僕たちが病気になったときは、「カラマンガモ」を飲みます。これは、山に特別な木を探りに行き、それを炭にしたものです。

以前はジュノのお父さんが「マナナバル（マッサージやまじないなどで病気を治す人）」でしたが、病気で亡

くなってしまったので、カヨパトンにマナナバルはいなくなってしまうました。でも、お金があればお店で熱さましや痛み止めの薬を買うこともあるし、病院に行けることもあります。

僕たちの村は電気がまだ通っていませんが、ソーラーの電気を使っています。夜は7時に寝るので、夕方6時頃には夕食を食べなければなりません。でも、家にお米がなかったら、親戚や近所にお米を借りるために探しに行かなくてはならないので、夕食が遅れま

す。暗くなってしまうたら、棒の先に火を灯して、明かりにします。でも、お米はお金があるときしか買えないので、いつもはサツマイモや芋、キャッサバ芋、トウモロコシを食べています。時々、お昼ご飯は食べられません。家にお米がたくさんあれば高校休まなくていいけど、お米が無いとお弁当を持って行けないので、学校に行かずに家の仕事を手伝います。

カヨパトンから高校まで歩いて、大体1時間半くらいかけて通っています。今、兄弟で勉強を続けているのは僕だけです。

僕には姉は1人と兄が3人いますがみんな小学校の途中で止めてしまいました。両親も兄弟も、仲がいいです。

兄の2人は、もう結婚しました。

両親は、バナナやトウモロコシ、ゴムをつくって収入を得ています。時々、僕もトウモロコシを製粉所に持って行く手伝いをしていました。カヨパトンからだ、セントニーニョの製粉所が一番近いです。僕の家には、馬もいないしバイクも無いので、バイクタクシーにお金を払ってトウモロコシを運びます。MCLでは3食お米を食べ歩いて、トウモロコシは出ないんですね。僕の家では、トウモロコシを炊いて食べることも多いので、きっと恋しくなるだろうな。

家族は、僕が勉強を続けることを喜んでくれています。でも、僕が家を出る日、母は泣いていました。

僕は、大学を卒業することが夢です。将来は海軍に入りたかったけど、MCLの奨学金は、銃を持つ仕事に就くためには出ないそうなので、船乗りになりたいです。海を見たことがないけど、憧れているんです。

好きな科目はMAPE（音楽・美術・保健体育）です。トゥマンディンの高校に行っていたときは、宿題で模造紙や色紙、ファイルを買わなくてはならない時、お金がないと提出することができませんでした。でも、トゥマンディ

ンの高校に通っている生徒はお金がない子が多いので、先生も分かってくれます。MCLの奨学生は、月に200ペソのお小遣いがもらえて、それで宿題に必要なものを買うことができるんですね。うれしいです。好きな食べ物、特にないけれど、お腹いっぱい食べたいです。僕は、新しい高校でジュノと同じクラスになりました。一緒に励まし合って、お互いに夢を叶えたいです。ご支援に、とても感謝しています。

これは、僕が15歳くらいの頃、お父さんが寝る前に家族みんなにしてくれたお話です。

僕の育ったカヨバトン集落は、電気が無く、もちろんテレビもありませんでした。日が沈まないうちに晩ごはんを作り、六時頃に食べた後が、お話の時間でした。小さい頃から、「父ちゃん、母ちゃん、お話をして。よく眠れるように」とせがんだものです。



「家族と七つの滝の化け物」

おかしむかし、山の奥の奥の小さな竹の家に、父ちゃんと母ちゃんと姉ちゃんと弟が住んでいました。

姉ちゃんは六歳、弟は四歳でした。家族の家は、村からとても遠く、七つの小さな滝を越えて行かなければなりませんでした。

山の奥の奥で、父ちゃんと母ちゃんは二ガウリやナス、小松菜を育てて町に売りに行き、お米を買って生活していました。

ある日も、両親は野菜を収穫し、洗って、束ねました。そして、父ちゃんが町へ配達に行きました。母ちゃんは、姉ちゃんと小さい弟がいるので、家に残って洗濯をしていました。家族は貧しく、馬を飼っていませんでしたので、父ちゃんは歩いて村に向かいました。七つの滝を越えると村があり、大きな道路に出ます。そこでジブニーに乗り、町に行きました。

町に着くと父ちゃんは、市場の八百屋で二ガウリやナスなどを売ってお金を受け取り、お米を大きな麻袋に半分と、干物の魚、塩、味の素、母ちゃんと子どもたちのお土産にパンを買いました。そして、急いで家に向かって帰

りました。家族の小さい家は、山の奥の奥にあるので、急がないと日が暮れてしまうからです。

父ちゃんが町でジブニーを拾い村に着いた頃には、夕闇が迫っていました。ここから、七つの滝を越えて山の中を歩かなければなりません。父ちゃんは、ジブニーを下りると早足で歩きだしました。

その頃、山の小さな家では、姉ちゃんと弟がお腹を空かせて泣いていました。お米を全て食べてしまい、父ちゃんが帰ってこない夕食のご飯がありません。母ちゃんは、泣いている子どもたちに言いました。

「もうすぐ父ちゃんがお米を買って帰ってくるから、そんなに泣いちゃダメよ」

そう言いながら、父ちゃんの帰りを待ちました。

父ちゃんは、母ちゃんと子どもたちがお腹を空かせて待っているのに、急いで歩きました。幸い、月の明るい夜でした。父ちゃんは、灯りなしで、月の光を頼りに森を歩いて行きました。そうして、五つ目の滝まで来たとき、年老いたおばあさんがいるのを見つけてきました。おばあさんも、父ちゃんを見つけて尋ねました。

「どこまで帰るのですか。もう夜で

はないですか」

「私の家は、まだ遠くて、七つの滝を越えた先です。おばあさんはどこまで帰るのですか」

「私の家はすぐそこです。この滝の近くです」

おばあさんはそう言ったかと思うと、姿を消しました。父ちゃんは、おばあさんは化け物だったかもしれない、と恐ろしく思いながら、家に向かって歩きました。

父ちゃんが六つ目の滝まで着たとき、子どもがいるのを見つけました。近づくと、まだ小さな男の子でした。七歳くらいでしょうか。父ちゃんは、男の子を人間の子ともだと思いい、尋ねました。

「坊や、どこに行くんだい？もう遅いよ」

「すぐそこが家だよ。もう着くよ」
「それはよかった。早く帰るんだよ」
男の子も、そう言ったかと思うと姿



講演会、報告会、家庭集會に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。

7 サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。

講演や家庭集會の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。

メールや電話でもお申し込みください。メール：mcltomo@yahoo.co.jp

電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）

を消しました。父ちゃんは怖くなって、森の中を小走りで家に向かいました。

父ちゃんが七つ目の滝まで着たとき、たくさんの化け物が現れました。その中には、先ほどのおぼあさんと男の子もいました。化け物たちは、父ちゃんに取り付いたかと思うと、その長い爪で父ちゃんの喉笛をかき切っていました。父ちゃんは、悲鳴を上げることができず、倒れました。お米や干物、パンの入った麻袋が地面に落ちました。化け物たちは、父ちゃんを道の脇の繁みに捨て、去っていききました。

小さな竹の家では、母ちゃんと姉ちゃんと弟が父ちゃんの帰りを待っていました。しかし、夜遅くなくても戻らないので、とうとう晩ご飯なしで眠ってしまいました。翌朝、夜が明けるとすぐに母ちゃんは子どもたちを起こしました。

「父ちゃんを迎えに行きましょう。心配だわ」

そうして、三人は最初の滝に着きました。そこには、父ちゃんのものらしい麻袋が落ちていました。二人の子どもが、麻袋に向かって駆けだしました。

「パン！」

「父ちゃんのお土産のパン！」

父ちゃんは、町に出るといつもパンを買ってきてくれました。姉ちゃんと

弟は、お腹がとても空いていたので、麻袋に駆け寄り、袋の中からパンを出して食べ始めました。母ちゃんも、きつと父ちゃんはトイレにでも行っているんだわ、とホッとして道端に腰かけ、パンを食べ始めました。しかし、しばらく待っても父ちゃんは現れません。

母ちゃんは、滝の周りを探し始めました。すると、滝の側に血の跡を見つけていくと、そこには冷たくなった父ちゃんが倒れていました。母ちゃんは、泣き始めました。子どもたちも、泣き始めました。泣きながら、七つの滝を越えて村に行き、村長さんに父ちゃんが化け物に取り殺されたことを報告しました。

村長さんは、村の若い男たちを呼び、油を準備させました。

「その七つの滝が、化け物たちの棲み処になっっているに違いない」

そう言っ、若者たちに七つの滝の

側の岩に油をかけ、燃やさせました。七つの滝のそれぞれの岩の奥からは、化け物たちの悲鳴やうめき声が聴こえてきました。炎に焼かれて、化け物たちは皆死んでしまいました。

母ちゃんと子どもたちは、父ちゃんを失った山の奥の家を捨て、村に移りました。村長さんは、父ちゃんを失った家族をかわいそうに思い、小さな家をくれました。そして、母ちゃんは村長さんの家の掃除をしてお金を稼ぎ、子どもたちを養うことになりました。姉ちゃんと弟は、学校に行くことになりました。

母ちゃんは、村長さんの家で良く働きました。子どもたちも、父ちゃんがいなくてもがんばって勉強しました。そうして、姉ちゃんは大学の教育学部を卒業して先生に、弟も工学部を卒業して技術士になりました。そうして、家族は幸せに暮らしました。めでたし、めでたし。

僕たちの住んでいる山には、たくさん化け物が棲んでいます。だから、暗くなってから山に出歩いてはいけません。たくさんの人で歩いていても、化け物に取り殺されてしまうかもしれないからです。ワクワクやアスワン、生まれてすぐに亡くなった赤ちゃんが化け物に変わったモモなど、ほんとうに

怖いのです。

僕は、この話を聴きながら、きっとおぼあさんや男の子は化け物に違いない、父ちゃんは殺されてしまったんだ、と予感しました。そして予感の通り、父ちゃんは殺されてしまいました。

僕のお父さんは、どうして子どもを寝かしつけるのにこんな怖い話をしたのかって？

昔話のほとんどは、化け物や鬼、やまんぼが出てくる怖いものでした。それに、僕たち兄弟は、お父さんとお母さんに挟まれて眠っていたから、怖い話を聴いても安心して眠ることができたんです。今でも一人で眠るのは怖いですが、一人で寝ていると化け物が来るかもしれないから、誰かと寝たほうがいいですよ。



この子たちの支援者になっていただけませんか！

Jessa Mae C. Balilihan (ジェサ・ミー・C・バリリハン)

2004. 9. 21 生 / アラカン / キアタオ小学校6年生 / マノボ族 / キリスト教徒

こんにちは。私の名前は、ジェサ・ミー。

アラカンの山あいの村、キアタオに住んでいます。キアタオ小学校の6年生で、この4月に卒業予定です。

私は4人兄弟の長女で、キリスト教を信仰しています。

私のお父さんとお母さんは、農業をしています。けれど、うちは土地を持っていないので、他の人の畑でバナナやトウモロコシ、コーヒーやカカオ、ゴムを育てるのを手伝って、お金を稼ぎます。

でも、収入はとても少なく、お昼ご飯が食べられないことがよくあります。

家にお米がないと、学校にお弁当を持って行けません。でも、あきらめずに勉強を続けて、やっと小学校を卒業できます。

弟や妹が勉強を続けるためにも、長女の私がいい仕事に就いて、家族を助けたいです。だから、高校に進学して勉強を続けたいです。

しっかり勉強して、将来は、学校の先生になるのが夢です。学校の先生になって、山の子どもたちに読み書きや計算を教えてあげたいです。



Bernadeth E. Iland (ベルナテス・E・イランド)

2000. 9. 15 生 / カリナン / カリナン高校3年生 / バゴボ族 / キリスト教徒

私の名前は、ベルナテスです。

戦前に日本人町のあった、タバオ市カリナンのタマヨンという村に住んでいます。

第2次世界大戦まで、カリナンにはたくさんの日本人が移民して、アバカ麻を栽培していました。私の住んでいるあたりにも、日系人の末裔の人たちがいます。

今、カリナンの辺りには、アバカ麻の代わりに、ドールやスミフルなどのバナナプランテーションが広がり、私の村の人たちも、プランテーションで働く人が多いです。

私は、8人兄弟の末っ子として生まれましたが、私が小学1年生の時に母が結核で亡くなりました。母がいなくなってから2年後に父が再婚し、新しい母と私はまあまあ上手く暮らしています。

父は、村の役員をしています。でも、お給料は少ないし、遅れることも多いです。よく親戚や近所の人に借金をしてお米を買ったり、お金を借りられないときは、バナナを食べてしのいでいます。

私は勉強が好きです。

うちは貧しいですが、将来は大学に行って、弁護士になるという夢があります。

高校3年生まで勉強を続けてこられたことに、とても感謝しています。お腹いっぱい食べられなくても、勉強をあきらめずにがんばって、夢を叶えたいです。



マラウイは、はるか彼方

宮木 梓

嘘の裏に真っ先に浮かんだのは、イリガンの町のママスコの人たちが、宿屋の前で一人歌っている私にくれた、共犯者のように親密な微笑み。

それから、MCLをイリガンに向けて朝5時に出発するというのに、「フィリピントゥームで出発するんだよね」ってともさんがセカンドハウスの2階で、その日誕生日を迎えたローズとコーヒーをすすっていたこと、電灯のあたたかなオレンジの光と穏やかな笑



顔。「いつてらっしやい」って部屋から見送りに出て来てくれた子どももの寝ぼけ眼と、やわらかい髪の毛についた寝癖。抱きしめられた腕の体温。

記憶にそっぽを向かれています。マラウイの戦場地になった区域の、水の底に沈んだように静かな廃墟の塊も、弾丸で穴だらけの家も、写真を見返せば確かにそこにあるのに、カレンダーから日々がすっぽりと抜け落ちたように、かすんで見えない、遠い…。

2月の機関誌に、12月にマラウイに行った体験を書いてほしいと言われて、途方に暮れている。締め切りは昨日だった。パソコンを立ち上げたけど、1行しか書かなかった。夜からインターネットがつながらなくなったので、そのせいにしてしまえ、と思った。

今日はもう書かなきゃいけない。インターネットはまだ回復してないけど、書かなくてはいけない。と分かっているのに、ほら、私はギターを手にして現実逃避を試みる。今から何曲歌うのですか、その後原稿に戻ってくるのですか。もう、どうしようもない。ほんとうにどうしようもない。「避難所で会った奨学生候補の子どもたちの背景、現地で見た戦争の悲惨さ、明るさを失わない子どもたちの様子…」

12月は忙しかった。毎日、放課後と夕食後に子どもたちを呼んでは昔話を話してもらって、次の日に日本語でまとめた。

子どもたちが帰省する前に、子どもたちの気分が乗っている間に、と私は急いでいた。早く早く。マラウイに出发するのは12月15日。MCLに戻ったらすぐにクリスマス会があって、子どもたちは故郷に帰ってしまう。

そんなときに、里子の一人が体調を崩した。ああ、子どもって、子どもって、忙しい時に限って具合が悪くなるの。構ってほしくて無意識に体調を調整できるんじゃないかって思っちゃう。放っておくと薬を飲み忘れるので、毎食後、目の前で飲んでもらう。

MCLで洗濯物はたらいにぶち込んですべて手洗いなんだけど、自分の服に加えて病気の里子の分も洗う。私にしないでいい、弟に任せろ、甘やかすなって言われるけど、ね。だって、汚れた服がたまっていくなだもん。

いい？私は明日からマラウイに行かなきゃならないから、お願いだから、ちゃんと薬を飲んでね。服は毎日着替えて、洗濯物はその袋に入れておいて。それから、治るまで弟といっしょに寝てはだめ。病気が移るからね。

出発の日、朝2時に起きて、洗濯を

済ませて支度をする。そうして、1時間遅れでイリガンに向かう車のなかで思ったのは、これで着くまでゆっくり眠れる、それだけ。

戦闘が終わったマラウイの町に入ることができるといっているので、スタッフの何人かは興奮していた。

私だって、実際にこの目で戦闘になった町を見たのに。避難所で今だに家に帰ることのできないたくさんの人に会ったのに。それなのに、子豚の丸焼きのクリスマスが終わって、爆竹の音に起こされて煙の中お正月を迎えて、子どもたちがわーっと帰ってきて授業が始まって、あっという間に日常に飲み込まれてしまう。今、目の前に



ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。

見えていないことは、忘れてしまう。

今日は土曜日。オフィスのドアがそつと開いて、子どもが一人入ってくる。えへへ、ギター弾きに来たよ。(オーマイグッドネス!) 洗濯は終わったの? 終わった。水浴びは? 終わった。

子どもに用事を見つけて追い出す作戦、失敗。仕方がないので、正直にないしかな。私さ、機関誌書かなきゃならないから、構ってあげられないけどいい? うん、僕、そこで一人で歌ってあげるから、機関誌書いていいよ。

だから、思い出そうとする。忘れなように、忘れないように。マラウイ、避難所の子どもたち、笑顔。思い出せ。

12月15日から18日にかけて、マラウイから車で1時間程のイリガン市に泊まって、毎日マラウイに入り、家が戦闘になった立ち入り禁止の地区にあり、帰宅できない人々の暮らすテント村を回った。

マラウイで、20人以上の奨学生候補の子にインタビューをしたけれど、私が一番印象に残っているのは、イリガンの避難所になっている体育館と、そこでの読み語り。

読み語りの前日の夜に、翌日の読み語りをする許可を取りに体育館を訪れ

た私たちは、特に子どもたちから熱烈な歓迎を受けた。初対面なのに、たくさんの子どもたちが抱き付いてくる。「この子たち、お客さんが滅多に来な

いから、うれしいのよ。私たちも、とてもうれしい」とお母さんたちが言う。訪問者がほとんど来ない。

そうかもしれない。MCLで働いている私だって、目の前の子どもたちで精一杯になってしまうもの。戦闘が終わってマラウイが報道されなくなるのと、避難所の人々は忘れられていくのでしょう。マラウイの戦闘の後はアラカンに戒厳令が出て、新人民軍の取り締まりが厳しくなっている。どこどこで発砲があつて何人が死んだとか、人々の意識は次のニュースに移っていく。

その日の予定が終わってマラウイからイリガン市に戻り、夕食を済ませて宿屋に戻る。

私は、毎晩宿屋の入り口の階段に腰かけて、帰り道を急ぐ往来の人々を眺めながら歌った。12月のミンダナオは、いろんなところでマスコの人のたちを見かける。マスコというのは、お金持ちの人の家々を回ってクリスマスのお金を歌い、お金を恵んでもらうこと。スタッフのベビンさんが、もう少し小さな声で歌ってねって言いに来る。宿屋の隣のパン屋さんのお客さんが、怪訝そうな目で私を見つめる。私に親しみのある視線をくれるのは、マスコの人たち。一緒にいたずらをしてるような目くぼせ。

私はマスコじゃないから、クリスマスキャロルは歌わない。私が歌うのは、平和を祈る歌。「カバヤパン(平和)」と「コン アドゥナイ ゴグマ ナア アン カリナオ(心に愛があれば、平和がある)」。

一月半ば、MCLのオフィス。外はこんなにいいお天気なのに、とコンピュータを覗んでいる私。そこに、ギターを弾いている子ども。

アズサー、次は何を歌えばいいと思う? (あはは、大人しく一人でギター

弾いてるって言ったのに) んー、パーセレーナードはどう? それなら弾けるでしょう?

階下から、4月に日本公演に行く奨学生たちの練習の鐘の音が聴こえてくる。窓の外からは、井戸のポンプがキィカタンキィカタンと鳴って、週末の洗濯をしている子どもたちの笑い声。月曜日に着る制服を、真っ白に洗い上げなくちゃ。それから、草刈り機の回る音。

マラウイは、この季節に毎晩くつきり見えるオリオン座よりもほるか彼方。けれど、今、同じ時間、確かに避難所の体育館で暮らしている人々を想像する。避難所の朝、水浴び、朝食…。戦闘以来、8か月続いて来た体育館での生活。忘れない。忘れない。2月にもう一度、奨学生候補の子どもたち会いに行く。



ミンダナオ子ども図書館についての情報、2006年からの日々の活動報告など詳しくはウェブサイトのホームページを参照されると、より深くわかります。

検索:「ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>
フェイスブック: 松居友 or ミンダナオ子ども図書館

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき、病気になるっても治せないとき・・・



ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、**医療や読み聞かせ等の活動全般にかかる経費と子供たちの生活費を支援**・・・自由寄付
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった方には隔月に機関誌『ミンダナオの風』と年一回絵本をお届けします。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。まだ支援者が見つからないにも関わらず放っておけず採用している140名ほどの奨学生達の学費。保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている200名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々に充てています。

機関誌を楽しみにしている方の場合、わずかな寄付でもお送りします。

他の方々に紹介していただければ幸いです。不要の方は、ご一報ください。

- 2、**植林環境支援**・・・6万円（ゴム、カカオの木600本、1ヘクタール、現地作業代）
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。
- 3、**保育所建設支援**・・・90万円（簡易保育所は止め、スタンダードにしました）
総コンクリート製をご希望の方は、130万円可能です。
開所式の参加や訪問も可能です。毎年チェックし、必要な場合は修理をしていきます。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み生活を保障（現在80名）。

支援には学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、下宿代、生活費等が入っています。

- 1、**大学生スカラシップ支援**・・・年額70000円（月額5833円）
- 2、**高校生スカラシップ支援（日本の中高生）**・・・年額60000円（月額5000円）
- 3、**里子支援（小学生）**・・・年額40000円（月額3333円）

スカラシップの場合は、振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校」「里子」と書いて振り込んでいただければ、現地スタッフの宮木梓よりお便りします。

その後、機関誌に同封して高校・大学生の場合は本人からの手紙（英語）、6月にスナップ写真、8月に成績表、12月にはカードが届きます。プレゼントや文通も可能です。日本語の手紙は、現地で翻訳して当人に渡しています。

小学生の里子の場合は、手紙はありません。プレゼントは可能ですが、文通は出来ません。

事前の紹介や希望、訪問などのご相談は、メールで現地スタッフの宮木梓（あずさ）さんか、

FAXで日本事務局の前田容子さんに！訪問の際は、ダバオ空港にお迎えに行き、

MCLに宿泊していただき自宅にもご案内します。宿泊費はとりません。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、

メール mclmindanao@gmail.com 現地日本人スタッフ：宮木梓（あずさ）

FAX： 0743 74 6465 日本事務局 前田容子

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>

ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名『ミンダナオ子ども図書館』

（ネットバンキングも可能です）■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900

■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 ○一九店（ゼロイチキウウ店） ■口座番号 0018057

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が講演料、謝礼に関係なくうかがいます。

サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。

メールや電話でもお申し込みください。講演を企画してくださるのも、大きな支援です。 12

メール：mcltomo@gmail.com 携帯：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）